

<シロナガスクジラ：科学博物館>



東京・上野公園には博物館や美術館がたくさんあります。初めて来た人はどこの建物にどんなものが展示されているか分かりません。各館はどんな展示をしているか一目でわかるように工夫をしています。地球上で生息する最大の動物といわれるシロナガスクジラ（約30m）は、国立科学博物館です。

中園孝信（撮影・文）

「日本子ども支援学会」2018年9月フォーラムより（1.実践報告編）

日時：2018年9月15日（土） 午後1時～4時半

会場：東京学芸大学 C204 教室

総合司会：清 文枝（テレビ朝日アスク）

第1部司会：滝口 優

第2部司会：中山哲志

（文責：清文枝・深谷和子）

<はじめに>

深谷昌志（日本子ども支援学会会長）

3月に「日本子ども支援学会」が発足して、これが一回目のフォーラムです。全体としてはまだ100人超の小さな学会ですが、ウェブを活用して、ある意味で時代に先駆ける在り方を試みる、特色のある学会に出来ればと考えております。地方会員が4割程度おられますし、本日のご欠席者にも、（メールによる）学会ニューズレター「風の便り」（臨時増刊号）で、フォーラムやワークショップの様子をお伝えしようと企画しております。

伝統的な学会は、いわば恐れ多い人々が真面目に議論をしている場ですが、それに加えて、研究と実践活動をしている会員たちが、交流しながら情報交換の場をもつことにも意味があるのではと思っております。年に1度の大会ではなく、研究や実践の発表をするフォーラムやワークショップを何回か設定して、お互いの学びの場にしたい。ウェブを最大に活用して、経費をかけずに運営するアクティブな学会を作れればと思っております。



今日のフォーラムの内容は2つあり、一つは実践報告。東京の北区と奈良の天理市の会員の活動をご報告いただいて、「子ども支援の隘路とは何だろうか」を議論していただく。もう一つは、過日、早稲田大学の根ヶ山先生のご本を読ませていただいて、子ども支援のために非常に示唆に富む内容（言葉）に出会いました。それが「アロマザリング」です。子ども支援のために、直接この概念をお伺いしたくてお招きしました。前半は根ヶ山先生のお講義、後半ではとりわけ、分かりやすいアロマザーとしての「養育里親」の方々に日々の奮闘ぶりを伺い、みなでこの概念を共有しようとするのが、第2部となっております。

なお、「風の便り」臨時増刊号として、本日の内容を全会員にお届けする予定となっております。

第1部：実践報告（パネル討議）

「子ども支援の隘路となるもの」

司会：滝口優（白梅学園短期大学）

パネラー：安田勝彦、栗山由明、市本貴志

滝口：それでは早速パネル討議に入りたいと思います。初めは、東京都北区「わくわく広場」の安田先生からお話をいただきます。

1. 北区「わくわく広場」の活動から 報告者：安田勝彦（わくわく広場代表）
栗山由明（わくわく広場リーダー）

安田：北区立神谷小学校内の放課後子ども支援事業「わくわく広場」実行委員長の安田です。今日はリーダーの栗山さんと一緒に参りました。

わくわく広場の事業は平成27年、それまで厚労省の関係で「学童クラブ」が運営されていましたが、新たに文科省から支援があり、子どもさんの「放課後等の安全・安心な居場所」ということで、この制度がスタートしました。

<2つの支援方式>

北区の中で二通りあって、一つは委託方式。株式会社や社会福祉法人に委託して行っている事業で、25校。もう一つは直営方式で、教育委員会が直接かわりあいの中でやっているもので、9校。後者は、もともと地域の教育力を生かすということでスタートしました。それがなかなかうまくいかなくて、委託方式が増えてきていましたが、私どもは、地域の教育力を生かしながら取り組もうということで、直営方式にかかわっております。

具体的には、毎日放課後にお子さんの支援をする。長期休みは朝の9時から夕方5時まで子どもさんの面倒を見るという形をとっています。1日の体制としてはリーダーさんが一人とスタッフが5人で、実施運営をしています。特徴としては、町ぐるみでやっていくという点です。リーダーも町でそれぞれ活動していた人で、絵画、音楽、スポーツなど、得意な人がリーダーになっていただいています。スタッフは主に地域のお年寄りの有償ボランティアで、「見守り」のお手伝いをしてもらっています。お子さんたちとは祖父母と孫のような交流ができていますし、また、町のいろいろな方に講師になって参加してもらっていますので、「町ぐるみで子どもを見守る」という体制になってきているかと思っています。



カリキュラムも作って動いていて、スタートして2年ちょっと経ちますが、成果は上がっていると感じています。

中心である神谷小学校は、全校で347名。登録者は276名（登録率73.8%）ですが、実際に来る子どもは1年生から4年生で、5、6年生になると、習い事などで来ない子が多くなります。1日平均で30人位。多い時は70、80人と、教室に入りきらない位になりますので、体育館を利用するなど、学校と協力関係を取って進めています。

どんな活動をしているか、次にリーダーの栗山さんからスライドで紹介してもらいます。

<活動の内容>

栗山：北区の殆どの学校は委託方式ですが、神谷小学校は、わくわく広場の直営方式をとっています。体制としては、区の職員として、プラン担当職員が1名、児童指導員3名。それから、地域リーダーが7名、地域サポーターは22名の登録があります。こちらは主に地域住民で構成されています。

スライドで周辺の様子を見ていきますと（省略）、東京都北区は、埼玉県との境、隅田川の流れる近くに神谷小学校があります。その教室の一つを「わくわく広場」として学校から借りて使っています。

平日は、始まる前と終了時にスタッフのミーティングを行います。授業を終えて子どもたちがやってきます。カードで出席を確認します。宿題をやる子は、だいたい先に済ませ、座ってゲーム読書などを行っています。子どもの要望によって、ゲームも増やしてきました。最近、将棋が人気です。ゲームなどをしていますと諍いも起こりますが、争いごとの仲裁もスタッフがします。小さな工作も用意して、特に雨の日にはたくさんの利用者がきますので、工作が役に立ちます。スタッフからいろいろな提案をしてもらっているのですが、その一つとして絵本の時間も生まれました。

校庭での遊びは、学童クラブとも一緒に遊んでいます。怪我が一番気になるので、スタッフもそこに一番気を使います。雨が降ったときは廊下とか玄関のロビーなどで遊びます。

継続して行うクラブ活動的なものにダンスがあります。スポーツもレギュラーで月1回から2回。たまに体験会的なものも入れています。塾とはちょっと違う形、「わくわく」らしい形で、そろばんや習字も取り入れています。最近、俳句も始めました。子どもたちが創った俳句を毎日小学生新聞に投稿していますが、入選者を学校で校長先生が表彰するなど、放課後の活動と学校とのつながりも見せています。事前申し込みの必要な、しっかりした工作もあります。田植え体験は、季節を感じさせたくて企画したものです。小さな田んぼなんですけど、ちゃんと季節は巡ってきます。今年は暑すぎて少し米の出来は悪いです。紙飛行機も人気のプログラムで毎年やっています。

プログラムの中では、地域の人たちの活動もどんどん紹介していて、講師は多彩です。リーダーの中にはプロのミュージシャンもいます。年末年始はイベントを考えています。ダンスの発表会もその一つです。スタッフがサンタに扮してクリスマス会もします。北区には、江戸囃をやっているグループがあるので、毎年来てもらっています。8月のイベントでは、竹で水鉄砲づくり。慣れない工具を使ったり、自然の素材に触れたりしたいので企画しました。陶芸は良くするのですが、今回は初めての試みで、みんなの一つの陶芸作品を作りました。8月の暑い日に校庭で色付けをし、ついこの間焼きあがってききましたが、案外格好良くできました。

司会（滝口）：ありがとうございました。では、今の報告と映像を見てご質問がありましたら挙手願います。



清文枝会員：多彩な活動をされていますが、講師はどのような形をお願いしているのですか？

安田：地域で活動していますので、地域の人脈を使って「あそこには絵のうまい人がいるよ」とか「音楽のできる人がいるよ」という情報をもらって、直接お願いをします。講師料は出ます。先ほどの地域サポーターも、安いですが有償ボランティアという形で出ることになっています。講師の方もそれに準じて、だいたい 5000 円ぐらいですか、出ることになっています。

森永徳一会員：今の大学生は子どもとのやり取りがうまくないということがありますが、学生の体験場にはならないでしょうか。もう一つは、大学の方でやれることは何かありますか。

安田：子どもさんは学生さんを好むんですね。一緒に動いてくれることを喜ぶますから。

ただ、確かに今、コミュニケーションの取り方が上手じゃない学生さんがいらっしやいます。手伝いに来て「いったい自分はどうしたらいいか」という相談を持ち掛けられることもあります。やってみて覚えてもらうしかないの、その都度フォローをしながらやっています。

今やっつけているお年寄りの方も、それぞれ味があって、子どもさんと違う意味で人気があります。

栗山：大学生は大歓迎なんです。今来ている人は非常に安心して任せられる状況にあります。

こちらとしても、来てもらいたいので働きかけはしています。でも平日子どもたちが来るのは早ければ 1 時くらい。その頃から来られるかという、学生さんも授業があるので難しい。何校かにお願いしたんですが、それでなかなか実現しないという状況です

森永徳一会員：大学とのコミットメントがうまくできていないのではないのでしょうか。欧米のように、ボランティアが認定されるような制度がないと、学生さんがうまく挑戦できないのではないかなあ。

栗山：逆にこちらから伺いたいのは、大学側の制度として作ってもらえれば、北区だけでも 34 か所あって十分使える場なので、ボランティアだけではなく授業の実習などでも使えないものかと思うのですがどうなのでしょう。制度的にダメなんではないかな。

安田：ただ、受験の時には、ボランティアをしたという証明があれば、一つの材料になるということもあって、そういうお申し出は何件かあったんですね。そういう時は言っていて、こちらからも証明書が渡せるようにしてあります。

司会 (滝口)：北区の報告については、時間の都合で、この辺で終わらせていただきます。続いては天理市の子ども支援活動から、天理市議会議員の市本貴志さんにご報告いただきます。

2. 天理市の子ども支援活動から 報告者：市本貴志

(天理市議会議員・
副議長・地域支援センター副理事長)

市本：奈良県の天理市は、人口 6 万 7000 人ほどの小さなところ。宗教名がそのまま町の名前になった全国でも珍しい宗教都市です。僕自身が母子家庭ということもあって、小さいころ母親が働きに行ったら、近所のおばちゃんが「うちに食べにおいで」というコミュニティがいっぱいありました。でも今、田舎ですらなかなかそういうことがない社会になってきています。

子ども支援の活動について何をしたらいいか、1 年ほど、色々なところで勉強させてもらっている時に、夏休み中に栄養失調の子どもが出るっていう話を聞きました。「ほんまかいな？」っていう話ですが、でも現実にあるって先生たちが言うんですね。給食で栄養を保っている子どもが、夏休み栄養失調になるっていう信じられない状況があるんです。じゃあ、「食」というものについて何かできないかと「子ども食堂」といわれるものやってみようと思立ちました。



注：運営の手違いで、講演中の写真がありませんでしたので、写真をお借りました。

<子ども食堂のスタート>

まず、いろんな農家さんのところで、「米下さい」とか「ジャガイモ下さい」とか「ニンジン下さい」とか貰いに回りました。「お前、家に食べるものないんか？」とか言われて、「いやちょっと、子ども食堂するんで」と言うと、「お前、食堂するんか?」「いえ、ちょっと意味が違います」なんて、いろんな方とやりとりしながら始めました。

「貧困の子どもを集めて何をしようとしているんだ」ということも言われていましたが、現状を踏まえて、今、大人が子どもたちに対して何ができるのかということなんですね。田舎では、おじいちゃんおばあちゃんは多いんですが、その子ども達、つまり現役世代は大阪とか東京とか、外へ出て帰ってこないんです。おじいちゃんおばあちゃんが孫と触れ合う機会も少なくなって、世代間の交流もなくなってきています。

そんな中で、子ども食堂をどこでしようかとなった時、市長とも色々話して公民館を選びました。公民館は災害時の避難場所であり生涯学習の場になっていて、子どもが行くことはなかったんですね。奈良県は県外就業率が1位ということで、お父さんお母さんは県外に働きに行っていて、子どもは公民館に入ったことがないという状況でした。

小学校区に一つ「子ども食堂」を開催したいと、地域まわっているいろんな方にお話ししながら作りました。天理市には9つの小学校区があるので、9つです。開催されている形式は、子ども会の方が主体でやっているところもありますし、自治会が主体でやっているところもありますし、実行委員会形式でやっているところもあります。実行委員会形式でやっているところは、私もですが、市長自ら行ってエプロンをしてカレー配って、子どもの横で、子どもたちの悩みも聞きながら一緒に食べています。

子ども食堂をやる中で、ひとり親家庭が本当に多いなというのが見えてきました。「子ども食堂に行ける子はええな」という言葉も実際に言われて、なかなか表に出られない子どももたくさんいるようです。

<空き家や公民館を使って>

天理市には、空き家がたくさんできていまして、「福祉の活動をするんだったら、使ったらいいよ」と、裏の広場が600坪もある空き家を「好きなように使って」と貸していただいているんですね。そこで奈良県里親会の方と相談をしながら、学習支援をしたりということもさせていただいていますし、児童養護施設も近くにありますので、その人とも連絡を取り合いながらの活動もさせていただいています。

ではスライドを見ていながら（省略）子ども食堂の様子を何か所かご紹介していきます。

市役所から一番近い小学校から子ども食堂を始めました。子ども食堂を始めるにあたって、何をどうしていいのかわからなかったのでも、奈良県内にある短期大学の調理学の先生に栄養の摂り方を教えてもらって、調理はその先生とゼミの学生、更に地域の方々にも参加していただいています。公民館というのは災害時にも使いますので、炊き出しの練習にもなるということで、地域の方が一緒にやっていただいています。基本カレーが多いです。

この小学校の全校生徒は300人位なんですが、ご家庭の状況が厳しいお子さんだけにチラシを渡すというのは学校ではしにくいということで、全員にチラシを渡したんです。だから何人来るのがわからなくて、初めての時は念のために100食分作っておきました。申し込みは20人位だったんですけど、ふたを開けたら80人位来たので、たくさん作っておいてよかったです。費用は、カレールーを買った分だけ。後は全部頂いた物で作っています。他の地区の子供会のおかあさんたちもこの時に参加していて、このお母さんたちが自分の地区に戻って、今度は自分たちが主催として子ども食堂をしてくれています。

食べた後で何かしようということで、地図クッキーを用意しました。これは障害者施設の方々の授産品を活用させていただいています。ジグソーパズルのクッキー版で、47都道府県がクッキーになっています。エリアごとにクッキーの色と味が違って、日本地図を仕上げたら食べていいというものです。学びながら楽しく遊んで食べるというものです。

<多くの人の参加を得て>

今、プログラミング教育も始まりましたが、パソコンを自宅に持っていない子も多いので、近畿大学のプログラミングの先生がパソコンを10台自前で持ってきて、プログラミング教室ということで子どもたちに教えてくださっています。大人も映っていますが、小学校の先生も「私らも、教えなあかん」と習いに来ています。教育長も時間があれば必ず参加しています。

この時は、食事の時に大学の先生が栄養や調理についての説明も子どもたちにしてくれました。取材も来ていて、このように奈良県内ではいろいろと発信しています。

奈良県内で子ども食堂を作っているところのネットワークを作りました。事務局は奈良県の社会福祉にやっただけです。どのようにやっていったらいいかというようなご相談や、食材をどう集めるかなど情報を交換しています。

公民館なので、建物はいいところもあれば古いところもあります。

ここは、新しくできた公民館で、オープンテラスを作って開放的な雰囲気です。いらなくなった県の建物を市がわけていただいて改修して作った施設です。知り合いのご婦人にお声がけをして、この地域はその方々がやっただけです。基本的に野菜から食事を考えて作っていくので、カボチャの時期はカボチャのプリンなんかも出てきました。スイカやイチゴは奈良県の中で天理市が一番取れるので、スイカやイチゴも良く貰ってきて出しています。

柳本という地区では、子ども会のご婦人が食事の用意などやっただけです。場所にもよりますが、平均50人くらいが子ども食堂を利用しています。教育委員会が「サタデースクール」といって色々な講座を設けている活動があるのですが、こちらは、その講座があるときに合わせて、子ども食堂を開いているところです。子ども会の会長さんが折り紙の先生なので、折り紙を教えてください。

<おてらおやつクラブ>

子ども食堂を各地区で始めるにあたって、「子ども食堂とはなんだ？」というシンポジウムを里親会の方や宗教家の方にも快く御参加いただいて開きました。今、全国的に広がっているNPO法人で「おてらおやつクラブ」というのがあります。お寺さんが、頂いたお菓子やお供えを困っている人たちに施そうという考えからできたものです。今は、申し込みがあったら郵送しているんだそうですが、全国で900以上のお寺さんがそういう活動をされています。そういう風に色々な方々が活動されている中で、天理市にもこういうところがあったよと、市長は子ども食堂を新たな居場所だととらえて取り組んでいます。

また奈良県は、地元の食材、例えば大和野菜や大和地鶏を子ども食堂に使ったら、領収書を持ってくればお金を払うというシステムを作っています。県産品を子ども達にも食べてもらおうという県知事の取り組みで、予算にも反映されているということです。

司会 (滝口) : 私も小平市で、子ども食堂を自分で始めましたが、行政は動かないです。行政が取り組んでいるのがすごいと思います。

市本 : 天理市の近くには養護施設がありますが、これは、もともと天理教がやっただけで、前は天理教の中に学校があって、子どもたちはそこに通っていたのですが、今は公立の学校に通っています。そこで感じるの、やはり親の愛情不足というのは大変だなと・・・。いい悪いの判断がなかなかつきにくい

し、100%と言っていいほど虐待を受けて入って来ています。だから、先のとがった鉛筆を他の子の目に向かって投げるといったようなこともあったりして、先生方がビクビクしていらしたり。子どもに愛情を注ぐ、愛情をかけてものを教えていくのは大事なんだなあ、と思います。

この間奈良県の中で、戸籍の問題、無国籍の子どもを救う団体を立ち上げました。「ほんまかいな？」と思うんですけど、戸籍のない子が結構いたりするんですね。パスポートは取れないし、いろいろ不都合があるので戸籍を回復するための活動を始めたのです。その子どもさんたちを預かたりもしているのですが、爪を切るということすら教わっていないんです。「爪、めっちゃ長いやん。どうした？」って言うと、「爪って切るもんですか？」という発言があったり、色々とびっくりします。こういうお子さんたちも人と関わっていくことで成長していくんだと思って頑張っています。

司会（滝口）：二つのケースを紹介していただきました。今回のテーマは「子ども支援の隘路となるもの」で、支援が必要な子どもたちをどう支えていくか。北区の取り組みと天理の子ども食堂の事業と、行政ぐるみでやっているケースをご紹介します。この後、皆さんの発言でまとめていきたいと思いますがよろしいでしょうか？

まず天理市の活動について、質問が追加であればお願いします。

日高真智子会員：千葉県の流山市なんですけど、やはり子ども食堂をやっている方たちが結構います。親たちは500円から300円。子どもは100円。親たちも子どもたちも満足して食べますが、その後は下げて終わりなんです。私たちは「食べたら洗う」。そこまでが食事なんですよね。それが欠けているなあってすごく思ったんです。お金で愛情をもらう。それをきちんと返す。そういうところが必要だと思うんですけど、天理教ってということで、そういうこと学んでもらうのに、何かやっていますか？

市本：天理教がやっているのではなく、地域の方がやっているのだから、地域ごとに子ども食堂のやり方は違ってきます。食器類は持ってきてというところまでは指示します。洗うまでできるかということ、そこまではなかなかないです。高校生以上が300円、あとは無料ですが、家族でファミリーレストランに来たという感覚で食べている感じなんです。教えるという部分でいえば、なぜ「いただきます」の合掌をするのか、「農家の皆さんがどんな思いで提供してくれているのか」というような話はします。

司会（滝口）：北区は費用は区からということでしたが、天理はどうですか？市がやっている？

市本：開催する公民館の使用料と光熱費が減免。費用無しで使っていていいですよ、となっています。食材はほとんど寄付でまかなえていますので、頂いたお金は次の食材に充てます。それで今のところ回っています。スタッフは完全無償です。カレーが食べられるというメリットはあります。

司会（滝口）：皆さんの中で放課後活動をしていらっしゃる方から、この二つの活動のどこが優れているか、或いはこのようにしたらもっといいのではないかとといった二つの点から、お話しいただければと思います。また、子どもに関わる活動でされているのであれば、紹介していただいても結構です。

大山光子会員：足立区で放課後子ども教室の実行委員長と子ども食堂もしていますが、まず北区の件で伺います。委託の部分と直営の部分と、内容的には違いはありますか？足立区は、公社が仕切っていて、その中で実行委員長が工夫をしてやっているのだから、直営とか委託とかの区別がないので興味があります。

安田：委託の場合は、株式会社や福祉法人が年間予算1千300万円位で活動されています。そうすると、その枠内でスタッフなどの人件費などを賄いますが、収益を多少上げることを考えると、私ども直営でやっているところと比べると、メニューなどは少ないという感じを受けています。私どもは地域の皆さんの心意気でやっているのだから、有償ではあるんですけど、いろいろアイディアを出していただいて「こういう風にやったらできるんじゃない？」と実現に結びつけています。いろんなことでの心意気みたいなものは違うのかなという自負はあります。

大山光子会員：足立区も実行委員長の裁量で色々と工夫ができるのだから、工夫をするのに、今日は頂いた

情報を持って帰りたいと思います。

子ども食堂を私が開いたのは、足立区は孤独な生活をしている人が多く、子どもたちも日曜日は朝昼晩ままならないという現状があるので、とりあえず皆で楽しく食事をとれる場所を設けようということで動きました。区はまた別の方向で動いています。そうしましたら、

家族皆で来るようになってくださって、大人は200円。お年寄りも一人ではつまらないと、野菜をもって200円もってきてくださいます。そうすると大人の費用で回すことができ、補助金とかなしで、何とか回っています。ただし、会場費がかかるようなところだと全く回らないので、区に「会場費は減免にしてください」と申し込んで減免にしてもらっています。で、採算が取れて、継続ができる形になりました。1か月に1回しかできないんですが、

日々の運営の中で見えることもあります。食事の仕方で日常生活、子どもたち家族の食事の仕方、食べたことがあるないのやり取りの中で、どの程度の生活をしているのかという発見があります。それを行政の子どもセンターの機関の方につなげるということができたり、行政の方からの情報で、「こういう人がいるので、その方をお誘いしてもらえませんか」というようなやり取りで進めています。

日高真智子会員：先日、あるところで、「子ども食堂にて」という映画の試写会がありました。子ども食堂に心に痛みを持った子どもたちがやってくる。その心の痛みを一人ずつ紹介していく。そんな映画です。そうした子どもたちが、私たち里親のところにやってくる。里親や施設に行ったり、または民生委員とか未成年後見人のお世話になる子どもたちが、いっぱいいます。

子ども食堂やっていらっしゃる方たちは、みなそうした事情に触れると思うんです。そうした場で、保護司、民生委員、栄養士などが輪になって、困ったことにちゃんと答えられる。そうしたことが必要だと思っています。

森永徳一会員：地方の空き家の問題を、街中の問題とタイアップできないかなと考えています。信州大学で私の友人が、大学丸ごとで、宿泊イベントをしました。こうしたイベントを通して、田舎の生活と都会の生活をうまくつなぐことはできないのか。忙しい都会の生活と自然豊かな田舎の生活を、行政がうまくつないで何かできないかなということを考えます。日本全体がボランティア、ボランティアというけれど、村おこしの現状を考えてきちんと予算化していかないと難しいかと思いますが、出来なんでしょうか。

司会（滝口）：地域内のことと、地域をまたいだことについて、両方のお話があるかと思いますが、そのあたりいかがでしょうか。

市本：以前「通学合宿」という試みをやっていました。学校帰りに、公民館で寝泊まり2泊から3泊するという試みです。学校から戻ってきたら、地域の歴史を地域の方々が教えるということ、公民館を使ってやっていました。

空き家の話をいただきました。「空き家コンシェルジュ」というところの会員になって、空き家を3軒くらい借りて、活動に使っています。行政が踏み込めないのは私有財産の使い方。ただ、空き家の利用としては、移住も含めて空き家での体験をしてもらっています。子どもたちの宿泊体験というのも、いいアイデアだと思うのでやっていきたいなと思います。従来は、キャンプというイベントが多くあったんですが、最近はなくなっています。そうした意味で子どもたちと宿泊して何かするという機会は減ってきているので、何か生かしていきたいなと思います。

司会（滝口）：高齢者の問題でも同じようなことがあります。私も小平でコミュニティサロンを開くのに、空き家を使っています。空き家だから貸してもらえんですが、それを整備するには100万のお金がかかる。そうするとなかなか手が出ないわけです。ですから、空き家もうまく管理しないと使おうにも使えないんですね。行政がうまく絡んでくれないと個人ではものすごく大変です。

深谷会長：話題を少し戻していただけますか。北区の場合は、23区の中でも特色があるプログラムなんではないでしょうか。それから、何百万円という金額は、好きに使えるのか、使用するのに細かく規制がついているのか。どうなのでしょう。

安田：予算は細かく仕分けされています。委託先に支払われる1千何百万の中に人件費も入っています。直営の場合は人件費は教育委員会が全部出しています。それ以外の使えるお金は年間160万円くらいです。一番かかるのは人件費なんですね。あとは、イベントにかかった費用をどちらが持つかというところですね。

そこで、ちょっと問題提起なんですけど、よろしいでしょうか。

今回、プランを実行するときに、ずっと行政とやり通りをしました。その時に（以前）深谷先生からご指導いただいた「アフタースクール」の概念をもって臨んだのですが、実際問題として教育委員会が考えている「わくわく広場」の内容は、それと考えていることが全く違うんです。「安心安全な居場所だったらいいよ」という考え方なんですね。アフタースクールは、せつかくの放課後にもっと教育的な色彩を与えてという考えだと思いますが、そうしたことを進めようとやり取りをしたんですが、文科省も含めて「総合プラン」のあり方は、ただ「単なる居場所づくり」となっているんです。そのあたりを深谷先生に色々と教えていただきたいです。

深谷会長：アフタースクールは欧米も含めて、いろいろな国でやっています。その中で日本のアフタースクールは、残念ですが、実にプアとも言えそうです。

例えばアメリカは、本格的に教育委員会が責任をもって、大きなお金も資格も出しています。ボランティアではなく、学校とは違う形でしっかり教育する場なのです。ですから、アフタースクールには必ず校長がいまして、それも大学院を出ていないといけない。ですから、ロサンゼルスとかシアトルなどで見かけるアフタースクールは、すごくいい場となっています。学校は教えるところ、アフタースクールは体験するところと、はっきり機能分化しているんですね。

ヨーロッパの場合は、どちらかというところとゆっくりくつろぐ場ですけど、これもかなりちゃんと制度的に保証されています。

日本の場合はどうしてしまったのか。国がきちんと責任を持つところがない。ボランティアの比率も非常に高いんですね。本当は、行政で責任を負わなきゃいけない部分とボランティアがやる部分を分けていかなければならないのですが、その辺がちゃんとしていない。いつまでたってもそのままなんです。

ところで北区では、直営のシステムは増えているのですか、直営できないところの理由は何ですか。

安田：直営システムは増えていません。直営ができないところは、地域にそれを請け負うだけの力がないということです。それを運営する組織作り、人材含めまして、その力が集められないということですね。

深谷会長：天理のケースですが、子ども食堂はいろいろなタイプがあるでしょう。その中でなさっているのは、制度的な子ども食堂ですか。

市本：名前は子ども食堂なんですけど、居場所づくりの一つだと思っていまして、子どもだけではなく、障害をお持ちの方や独居の高齢者の方もお見えになっています。そこで色々な交流が生まれたらと思っています。

僕自身が、母親が働きに行っている時に晩御飯をいつ食べるのかとなった時、近所の方が気にかけてくれるという地域コミュニティが存在していたんですね。僕自身の中では、これはそのころ体験していた地域コミュニティの掘り起こしだと思っています。

後は、今、ひとり親家庭が多いということで、お母さんに育てられている子とお父さんに育てられている子というパターンがあります。働きに行っちゃるから、学校の様子など横のつながりで話す機会がないんですね。とくにお父さんは、学校では親同士知らない人だったのが、子ども食堂に来るこ

とで知り合いになるという面もあって、やってよかったと思っています。

子ども食堂に関しては「これで正解」と言うのではないと、僕自身は思っています。「ふれあいサロン」という名前でやっているところもありますが、ここは高齢化率が 50%を超えてしまってますので、高齢者の食事をしているところに、子ども園の子どもが行ってお遊戯発表をしたりとか、横へ座ってお話したりしながら食事したりしているという形です。

司会（滝口）：まさに世代間交流という形なんですね。大事なことだと思います。他にいかがでしょうか。みなさま、折角の機会ですから、ぜひ一言お話しください。

ちなみに私がかかわっている子育て支援は、小学校中学校の勉強会をやっています。塾などに行けない子どもを集めて、週に 1 回。大学ともかわりながら小平市で開くようになって 4 年目です。何とか毎年公立の学校に入れるということで、頑張ってきています。本当に大変な子供たちが、ひらがなさえ怪しい子供たちが来ているんです。そういう子ども達の行く先もどっかで考えなきゃいけない。そういうことの支援も必要だなと思います。

深谷会長：それはどういう場所でやっておいでなのですか。

司会（滝口）：公民館と協力してやっています。公民館は週に 1 回しか貸してくれないので、週に 1 回です。公民館長の計らいで勉強道具などを置かせてもらっているの、我々が行って、その道具を出して、使って、また戻して帰る、ということをしています。スタッフはボランティアで、私の所属する白梅大の学生も来ていますが、高 3 の数学などはなかなか荷が重くて学生も腰が引けちゃうんですが、何人かその場に入ってやっています。

日高真智子会員：今日はいいお話ばかりの子ども食堂のようですが、逆に千葉県では、市議員や老人ホームが「うちのご飯がいいですよ」というように「営利目的」で開くようになってきていると聞きます。規制というのまだないですし、それがちょっと怖い。「温かい家庭って何か」と教える教科が学校からなくなっているのかもしれないですし、そういう意味で、ちゃんとした子ども食堂の運営が役立ってくれればと思います。

司会（滝口）：今の件との関連で他に何かあるでしょうか。

保健所にきちんと届け出てやれば当然厳しく言われます。私どもも高齢者対象のサロンで年末に餅つきをやるんです。これまでは、もち米を蒸してつくというのを気楽に庭でやっていたんです。それが保健所に届け出たら、とんでもないですね。もう細かく、「これはやっちゃいけないんだあ」となる感じになります。そういうところにもクリアしなければいけないことがいろいろあると思うんですね。

中山哲志会員：天理の活動についてお尋ねしたいのですが、いい運動、活動を起こすときに、スタートしたものが個人から組織に移行していく時にどういう風に見通していくかがとても重要だと思うんです。先ほど、戸籍のない子たちの話が出ましたが、どのように組織を作っていくのか、どう進めていくのか、今お考えのことをご紹介いただくと、何かをスタートさせようという方のご参考になるのではないかと思います。

市本：子ども食堂をする場合は、反対に色々教えていただきに回りましたし、その問題を市長を含め担当の行政の色々な人と共有しました。

例えば食事が終わった後、ひとり親家庭さんの方でご相談など当然あるかもしれないと、児童福祉課の職員に待機をしてもらおうというようなことはしてきました。みんな巻き込むというか、皆で一緒に考えるということをしていったと思います。

無戸籍の場合には、たまたま NPO の理事長の会社に二人該当者がいまして、市役所に相談に行ったら「そんなこと絶対にあらへん」って何度も追い返されるんですね。「いや、ほんまにいるんや」って言って、やっと行政にかかって手続きに回る。当然法務局とかにも行かなければいけないんですね。見え

ないものを見過ごすのは簡単でしょうが、そこをしんどいですが深く見ていったら、いろんなことが見えてきました。そういうことをやってきたので、里親会の方などいろいろな人が声をかけてくれますし、空き家を借りてるから、そこで一緒に活動しましょうかという話にもなってきます。お弁当を作っている会社が余ったお弁当をもらいに行って、児童養護施設にもっていったり、知的障害の方の集まりが週に2回あったら、そこに弁当を配達してもらったりしています。こんな風に、いろんなところを巻き込むというか、個人では何もできませんから、皆でやっていけたらと思っています。

中山哲志会員：お伺いしていると、やっぱり市本さんのようなパイプになる方が、すごく大きいのだなと思います。北区の場合は直営でされているところがすごいと思うんです。今、行政は、どんどん民間に委託していますね。民間に委託する業者は選んでいるわけです。間違えのない業者を選んでこの予算の中でやってくれとなってやっているんですね。ということは、直営のところも維持していくためには大変だと思うのですが、定例会議はどのくらいあるのですか。

安田：会議は毎月1回、リーダー会議というのをやります。それからあと実行委員会を支えてくれている地域の町会だとかPTAだとかそういう人たちの集まりが3か月に1回ずつ。それがしっかり続いていくと維持できるということです。

司会（滝口）：いよいよ時間に近づいてきたのですが、いかがですか？

清文枝会員：行政というのはおおよそ縦割りになりがちなのに、なぜ天理では市長・教育長をはじめ、みんなの問題を共有することができたのでしょうか？

市本：地方議員はイメージが悪くって、なんかタカっているように見られることもあります。僕自身は悪いことはしていないので、議員バッジをつけてどこでも行きます。僕は行政職員さんを信じていますし、だから言うことも言います。市役所の職員さんからしたら「市本さんがいうことなら聞かなきゃあない」となっているんじゃないかと思います。

コーディネーターする人が必要なんだと思うんですね。たまたま僕の場合は僕がそれをしているだけで、どこに声を掛けたいか、そういう人を見つけて引っばっていく。そうしたコーディネーターをする人を見つけて捕まえてくるというのも、一つの手だと思うんです。そうすると、みんなが「何ができる？」って考えてくれます。

僕自身は、子どもの頃、子どもたちが食べている横で市長が食べているなんていう風景を見たことがないので、今の天理のように行政トップが子どもの横で食事をする光景がおもしろいというか、そういうのがあってもいいと思っています。

<まとめに代えて>

司会（滝口）：議論をまとめるというのは難しいことだと思いますが、2つのご報告は、子どもを支援するという点でとても大事な取り組みだと感じています。それを踏まえて、どうして行ったらいいのかという秘訣のようなものはいくつか出されたと思います。基本はやっぱり、支援をしようという人がまず強い意志を持ってやるということ。行政自体が思ってくればそれは一番いいのですが、そうでなくても、鍵になる人がいることによってかなり物事は動くということがあるのではないかと思います。天理は本当に全体で動いているなと思います。そうでなくても、議員さんの中や、私の立場でいえば大学などが発信すると非常に動きやすくなるということで、例えばサロンができるというよ



うなことがあるわけです。

私たちの場合、サロンを作りたいという人がいても、個人で声をかけると変に思われてしまう。でも「白梅という大学と一緒にやるんですよ」と言うと納得してもらえて物事がふっと進んでいく。そういうことがあるわけです。

それから、社会福祉協議会（社協）というのは、本当はいろんな意味で中心にならなきゃいけないです。ただ、今の社協は、こういう言い方をするとあれですけど、行政の中の天下りになってしまっている。そうすると、「行政が動かないのに勝手に動くわけにいかない」となるんですね。私はそういうのが歯がゆくて仕方がない。中にいる人は自分たちで色々考えているのに、上に行って止められてしまう。そういう中でね、社協が動き出すことが大事なんだと思います。

それから民生委員、児童委員など本当にいろいろな形で子どもたちとかかわりを持っている方々がいます。今日は里親の方もいらっしゃいますけど、子どもに関して何らかの関わりを持っている人たちが連携して動くと、支援になるわけです。「誰」が始めるか。その誰かは、「それを思った方」なんです。誰かがやってくれるわけではありません。思っ、誰か他にいれば手を繋ぐ。それが3人になり4人になり、それが行政を動かす。もっといけば国も動かす。法制を変えていただければ、どんどん変わっていくのではないかと思います。

先ほど無戸籍の話が出ました。日本人だけではなく、外国籍の子どもたちも多くいるわけですね。そういう人たちも「子どもの権利条約」上は救わなければいけないんです。そういうことも含めてやっていくことが必要なのかなと思います。

あまりに問題が多く出すぎて整理しきれません。次回2回目には、これが更に整理されていけばいいなと思ひまして、私の司会を終わらせていただきます。ありがとうございました。

(以上)

<<参考 URL>>

北区わくわく神谷ひろば

<https://www.city.kita.tokyo.jp/k-mirai/kosodatekyoiku/plan/kamiya.html>

天理子ども食堂ネットワーク

<https://tenri-kodomo.net>

<編集後記>

パネルやワークショップは、参加していて充足感の薄いものが多い気がしますが、今回のフォーラム（パネル討議）はなかなかの内容だったように思います。

ご参加のみなさま：ありがとうございました。

なお、ワークショップの第2部、ワークショップ（「アロマザリングの中での養育を考える」）は、臨臨時刊号「研究報告編」として来週発行の予定です。ご期待ください。（深谷和子）